

Monks Eleigh(Suff.)における14世紀の 賦役労働と雇用労働

能 登 征 夫

はじめに
史料について
1 . Register B
2 . Compotus
穀物生産の推移
賦役労働
1 . 週賦役
2 . 定地賦役
雇用労働
おわりに
<あとがき>

はじめに

カンタベリ司教座聖堂付属修道院(Canterbury Cathedral Priory, Christ Church)は、藤元のケントを中心に、エセックスやサリー、サセックス、バッキンガムシャー、オックスフォードシャー、サフォーク、ノーフォーク、ロンドンなどに60を超えるマナーを所有していた。広い範囲にわたって散在する所領群を管理するため、修道院は、ロンドンおよび遠隔のデヴォンシャー・アイルランドの所領を除き、他を4つの管轄区(custodiae)に分け、それぞれに所領管理人(custos maneriorum)を置いてそれらを直接的にコントロールしていた。Monks Eleighが所在するサフォークは、エセックスやノーフォークとともにエセックス管轄区(Custodia Essexae)に属していた¹⁾。

カンタベリ修道院の所領経営を論じたものとしては、ケント州内のマナーを対象を限定したR.A.L. Smithの著作と、エセックス管轄区のマ

ナーのみを扱ったJ.F. Nicholsの未刊行博士論文が最も包括的で最も重要なものである²⁾。しかし、両者ともそれぞれの地域における所領経営の全体像を明らかにすることを目的としており、単一の所領についての時系列分析は行なわれていない。筆者がここで行なうのはまさにこれであり、Hadleighと並んで、修道院がサフォークに所有していた数少ないマナーの1つであるMonks Eleighを対象として、カンタベリ修道院がサフォークで展開した所領経営の一端を明らかにする。

このマナーを選んだのは、以下の理由による。第一に、賦役徴収の実態分析が、直営地農業における賦役の役割・意味を明らかにするための第一歩になるからである。というのは、ケント州内のマナーとは異なり、ここでは週賦役や定地賦役が徴収されており、しかも、1381年の「農民戦争」以前に全面的な賦役の「金納化」が行なわれた後も、わずかな期間ではあるが賦役に依存しない直営地農業が続けられたからである。第二に、このマナーの農業・牧畜経営を論じた故森本轟氏の「カンタベリ司教座聖堂付属修道院の所領経営 Elleigh マナーの場合」(『帝塚山学術論集』第3号、1997年)を修正する必要が生じたからである。というのは、氏の論文には重大なミスが含まれており、一研究者としても、また、故森本教授から数え切れないほどの学恩を受けた弟子の一人としても、氏が行なおうとされた直営地経営の実態分析を正しい情報にもとづいて再構成すべきであると考えたからである。

前掲論文のミスとは、利用された史料の作成

年に関するものである。

論文には「荘役会計報告書」からピックアップされた数値によって作成された40もの表が掲載されており、それらにもとづいてマナー経営の実態分析が行なわれている。それゆえ、表の正確さが論文の生命線であるが、残念なことに、それらの表の年度表記に大きなミス 史料作成年の見誤り、もしくは論文作成時の転記ミスが見られるのである。例えば、多くの表において「1281-82年」(=1282会計年度)の数値が最も古いデータとして示されているが、このマナーには該当する年度の会計報告書は残されておらず³⁾、「1281-82年」のものとして記された数値は「1332-33年」(=1333会計年度)のそれである。言い換えれば、「1332-33年」とすべきものが誤って「1281-82年」と記載されているのである。ミスはこれに止まらず、「1336-37年」が「1282-83年」、「1338-39年」が「1284-85年」の如くに、いくつも見られる⁴⁾。

以上が森本論文に存在する欠陥であるが、論文の書き方からハンドライティングの読み方、研究方法に至るまで、ありとあらゆる指導を故森本壘教授から受けた弟子の一人としては、ただ単にミスを指摘するだけでなく、そうしたミスを引き起こしたであろう「特殊事情」についても触れておきたい。というのは、遺稿となった前記論文に見られるミスが、それ以前に執筆された数多くの業績に対して悪影響を及ぼさないようにしたいからである。特殊事情については<あとがき>において詳述するので、是非とも御一読いただきたい。

史料について

この稿を作成するにあたって利用した2種類の史料はいずれもCanterbury Cathedral Library & Archivesに所蔵されているものである。1つはRegister Bであり、いま1つは「荘役会計報告書」(Comptus servientis)である。これらについて簡単に触れておきたい。

1. Register B

Register Bは、ケント州外の所領に関するさまざまな時期の、さまざまな種類の文書(あるいはそれらを筆写したもの)を集めた「文書集成」(Cartulary)である。この中のMonks Eleigh (Illegh ' Monachorum)あるいは単にEleigh (Illegh ')に関する部分には、朱色の見出しで始まる以下の諸記録が記載されている⁵⁾。

マナーが修道院に譲渡された由来を記したDonacio, ドームズデイブックの記載の写しであるDomysday domini Regis, (当該記録作成時の)固定額地代の徴収日と金額を記したRedditus assise de Illegh', 十分の一税や荘役などの手当てについて記したAllocatio, (記録作成時の)賦役に関する諸々を記したOpera⁶⁾, (記録作成時)以前の賦役について記したItem Extentus vetus, 直営耕地などの面積と貨幣評価額を記したExtencio terrarum, 書式が異なり内容も一部省略されてはいるが、多くの点で前記 と共通する「慣習帳」Seruicie et Consuetudines Manerii de Illegh 'と続き、本稿では使用しない軍役金(scutagium)に関する2つの記録を挟んで、賦役徴収の廃止とそれに伴う貨幣徴収額を記した1379-80年の「地代帳」Rentaleが最後の記録となっている⁷⁾。

これらのうち、 ~ は同一人によって書かれたもので、 と はそれぞれ別人の手になるものである。 の後になんかの余白があるにもかかわらず が新しい羊皮紙に記されていることもあり、 ~ はある時期に一括して作成されたものと見なすことが出来る。作成年代が確定できる と伝来文書の写しである および

については筆写の時期が不明であっても特に問題はないが、 ~ および についてはいつ作成されたものか、あるいは少なくとも、いつ頃のことを記したものを確定する必要がある。

と については、 に記された固定地代額 (£9 4³/₄d.) が1326-27年の会計報告書のそれに合致すること⁸⁾, の中の収穫賦役の賦課数量が1317-18年以降の報告書のそれと同じである

こと、さらにはHadleighやエセックス州内のBorley, Lallying, Middletonなどの諸マナーの「土地評価簿」(Extenta) が14世紀初頭に作成されていること等々から判断して、所領経営に最も積極的で、かつ自身の諸業績に関する記録を残した修道院長Henry of Eastryの在任期間(1285 ~ 1330年) の後半に作成されたものか、またはその写しである可能性が高い。それゆえ、一括して書かかれたものであると仮定すれば、それ以前の賦役について記した を除き、

～ および の要約と考えられる を1317-18年～1326-27年頃のマナーの慣習を示すものとして取り扱っても差し支えないであろう。

賦役の調査記録である のExtentus vetusには、それぞれに のOperaとは少しずつ内容の異なる2つの記録が含まれている。仮に一方を -A, 他方を -Bとすれば、週賦役に関する記述で始まるAと、定地賦役の記述で始まるBといった記述方法の違いは別にしても⁹⁾、ともに「耙耕」賦役(herciatura) と「収穫」賦役(messio) の賦課数量において とは異なる記述が見られる。 では耙耕賦役の合計が114³/₄a. (エイカー) であるのに対し、 -Aでは125¹/₂a., -Bでは41a.になっており、 では収穫賦役が258a.であるのに対し、A, Bとも172a.となっている(表4参照)。

のOperaに記された114³/₄a.の耙耕賦役と258a.の収穫賦役がマナーの会計報告書に現れるのは1317-18年からであり、 -Bに記された41a.の耙耕賦役と172a.の収穫賦役が見られるのは1285-86年の会計報告書のみである。Canterbury Cathedral Library & Archivesが所蔵する報告書 問題となる時期のものとしては1285-86, 1310-11, 1311-12, 1317-18, 1327-28年のもののみ から判断すれば¹⁰⁾、 は、可能性としては1312-13年以降の、少なくとも1317-18年以降の現実を表現したものであり、 -Bは、可能性としては1309-10年までの、少なくとも1285-86年以前のマナーの慣習を表現していることになる。

ところで、 -Aに記された125¹/₂a.の耙耕賦

役と172a.の収穫賦役であるが、後者については1285-86, 1310-11, 1311-12年の会計報告書に見られるものの、前者については現存する報告書では確認できなかった。それゆえ、記載にミスがないとすれば、 -Aは1284-85年以前のある時期の賦役徴収について記したものである可能性が極めて高い。しかし、この程度の限定しか出来ない以上、史料として利用するのはほとんど不可能である。

2. Compotus

次に「荘役会計報告書」について触れたい。会計報告書そのものについては改めて説明する必要もないほどに多く利用されており、ここではこのマナーの報告書の作成年にかかわるものに限定する。

作成年は、「収支勘定」を記載した表面と「穀物勘定」「家畜勘定」「賦役勘定」の3つを記載した裏面のそれぞれの冒頭に、異なる書き方で記されるのが一般的である。1310-11年の報告書を例にとれば、表面にはCompotus Andr(ee) Le Forester s(er)uient(is) de Illegh 'a f(est)o s(an)c(t)i Mich(aelis) Anno r(egni) r(egis) E(dwardi) quarto usq(ue) ad id(e)m f(estu)m p(ro)xi(mu)m seq(ue)ns p(er) annu(m) integru(m), 裏面にはCompot(us) de Illeigh 'de Anno r(egni) r(egis) E(dwardi) q(ua)rtoと記されている。それゆえ、表面からはマナーと荘役の名前、対象期間と国王の治世年(エドワード王の治世4年のミカエルマス 9月29日 から翌5年の同日までの1年間) が、裏面からはマナーの名前と治世年がそれぞれ読み取れるのである。

問題なのは、Anno r(egni) r(egis) E(dwardi) quarto (= エドワード王の治世4年の) とあるだけで、これがエドワード何世の治世4年の報告書なのかが明示されていないことである。もっとも、エドワード3世時のものについてはAnno regni Regis Edwardi tercii post conquestum quartoの如く、terciiが付け加えられているため、結局のところ、それが1世と2世のどちらをさすかの問題になる。

これを解く鍵は、報告書そのものの中にある。例えば、マナー群を管理する *custos* (所領管理人) や *ballivus* (荘宰) の名前、賦役が課せられた日数より正確には、週数と日数などである。ここでは、本稿の内容と密接なかかわりを持つ後者を例にとって、*Anno r(egni) r(egis) E(dwardi) quarto* が、なぜ1世の4年(1276-77)ではなく2世の4年(1310-11)を表すのかを説明する。

裏面の末尾に記載された *Comp(otus) operum* (賦役勘定) の中に以下のような記述がある。*Et de DCCCC iij oper(ibus) de ex(itu) xxj terr(arum) di(midie) a die louis in sept(imana) Pent(ecoste)s usq(ue) ad Gulam Augusti p(er) viij sept(imanas) j die hoc anno sc(i)l(ice)t de q(ua)lib(et) t(er)ra q(ua)lib(et) sept(imana) v op(er)a.* (「また、ペンテコステの週の金曜日からラマスの日まで、今年は8週と1日に、21と1/2の「隷農保有地」(terra) から [徴収すべき] 903の賦役、すなわち1隷農保有地につき毎週5つの賦役について [報告する]」)。

ここから、この年にはペンテコステ (*Pentecoste*: イースターから50日後) の金曜日からラマスの日 (*Gula Augusti*: 8月1日) までに、8週と1日の賦役日があったことを確認できるのである。

これをエドワード1世の治世4年の会計報告書(1276年9月29日~1277年9月29日)と仮定して計算を行なってみよう。1277年のペンテコステは5月16日であり、この週の金曜日(5月21日)から8月1日までは「10週と2日」になる。したがって、これを1世の治世4年のものとすることは出来ない。

1311年のペンテコステの金曜日(6月4日)から8月1日までを計算すると「8週と2日」になる。上で見たように、21と1/2の隷農保有地が負っていたのは週に5日の賦役であるから、土日に賦役を行なわなかったと考えて6月5日(土)を賦役日から除外すれば、ちょうど「8週と1日」になる。それゆえ、これを2世の治世4年の会計報告書(1310年9月29日~

1311年9月29日)と断定出来るのである¹¹⁾。

以上が、本稿で使用した2つの史料に関する簡単な説明である。

穀物生産の推移

Register Bによれば、Monks Eleighには耕地(*terra arabil(is)*)が463 $\frac{1}{2}$ a.あり、このうちの14a.が十分の一税分として(*p(ro) decima*) 教区牧師に与えられていた¹²⁾。したがって、修道院が自身のために作付けできたのは残りの耕地449 $\frac{1}{2}$ a.であるが、1a.当たりの評価額は7d.(ペンス)と低く、耕地449 $\frac{1}{2}$ a.の年評価額は£13 2s. 2 $\frac{1}{2}$ d.であった¹³⁾。

直営地が保有農の耕地と混在していたのか、それとも別個の区画として存在していたのかは判然としないが、このマナーで栽培された作物は、小麦(*frumentum*)・ライ麦(*silignis*)・大麦(*ordeum*)・オート麦(*avena*)、それに大麦とオート麦を混合したドレッジ(*dragetum*)と豆類(エンドウ *pisa*, ソラマメ *faba*)であった。このうちドレッジとソラマメは例外的に栽培されたに過ぎず、特に後者は畑ではなく菜園に植えられることが多かった¹⁴⁾。

表1は穀物勘定に記された作物ごとの播種面積をピックアップして作成したものであるが、十分の一税分が面積の中に含まれているためそのまま計上した。また、この表には十分の一税分とは別に、播種面積としてカウントされながらも、その収穫が修道院の穀物倉に収納されなかった小麦畑とオート麦畑が含まれている。それは、給金として(*p(ro) solidat(a)*) 荘役と犁耕夫(*carucarius*)に与えられた一人当たり2a.の畑 小麦畑1a.とオート麦畑1a.である¹⁵⁾。十分の一税分は変動しなかったが、後者については犁耕夫の人数に応じて変動した。その結果、表1には含まれているものの、収穫が修道院の穀物倉へ運ばれなかった小麦とオート麦の作付面積は、1310-11年~1359-60年が12a., 1367-68年~1377-78年が11a., 1379-80年が10a.である¹⁶⁾。

表1 作付面積

年 度	小 麦		ライ麦		大 麦		オート麦		エンドウ		合 計
	a.	%	a.	%	a.	%	a.	%	a.	%	a.
1285-86	?		?		?		?		?		?
1310-11	132	43.0	20	6.5	16 ¹ / ₂	5.4	129	42.0	9 ¹ / ₂	3.1	307
1311-12	84	31.6	27	10.2	23	8.7	123 ¹ / ₂	46.5	8	3.0	265 ¹ / ₂
1317-18	129	44.9	19 ⁵ / ₈	6.8	8 ¹ / ₂	2.3	129 ¹ / ₂	45.0	3	1.0	287 ⁵ / ₈
1327-28	142 ¹ / ₂	51.5	14 ¹ / ₂	5.2	18	6.5	93 ³ / ₄	33.9	8	2.9	276 ³ / ₄
1329-30	106	41.1	12	4.6	15	5.8	116	45.0	9	3.5	258
1330-31	141	52.7	12	4.5	5 ¹ / ₂	2.1	95	35.5	14	5.2	267 ¹ / ₂
1331-32	128	47.2	14	5.2	16	5.9	97	35.8	16	5.9	271
1332-33	103 ³ / ₄	42.8	8 ¹ / ₂	3.5	17 ¹ / ₂	7.2	102 ¹ / ₂	42.3	10	4.2	242 ¹ / ₄
1333-34	145	53.8	12	4.5	20	7.4	87 ¹ / ₄	32.4	5	1.9	269 ¹ / ₄
1335-36	116	45.9	12	4.8	12	4.8	103 ¹ / ₂	41.0	9	3.6	252 ¹ / ₂
1336-37	116	42.7	16	5.9	24	8.8	108	39.7	8	2.9	272
1337-38	110	42.0	10	3.8	18	6.9	110	42.0	14	5.3	262
1338-39	113	47.6	4 ¹ / ₂	1.9	12	5.1	96	40.4	12	5.1	237 ¹ / ₂
<1339-40>	125	48.4	7	2.7	17	6.6	97	37.6	12	4.7	258
1340-41	102	39.6	16	6.2	21	8.2	100	38.8	18 ¹ / ₂	7.2	257 ¹ / ₂
<1341-42>	107	41.1	8	3.1	17 ¹ / ₂	6.7	105	40.3	23	8.8	260 ¹ / ₂
1342-43	137	47.7	7	2.4	18	6.3	107	37.3	18	6.3	287
1343-44	122	44.4	13	4.7	14 ¹ / ₂	5.3	107	39.0	18	6.6	274 ¹ / ₂
1358-59	100 ³ / ₄	41.6	10	4.1	21 ¹ / ₂	8.9	96	39.6	14	5.8	242 ¹ / ₄
1359-60	102	46.9	11 ¹ / ₂	5.3	12	5.5	80	36.8	12	5.5	217 ¹ / ₂
<1365-66>	77	41.6	12	6.5	10	5.4	73	39.5	13	7.0	185
1366-67	84	45.4	11	5.9	14	7.6	64	34.6	12	6.5	185
1367-68	84	44.2	7	3.7	14	7.4	72	37.9	13	6.8	190
1368-69	70	43.8	5	3.1	10	6.2	60	37.5	15	9.4	160
<1371-72>	70	43.5	6	3.7	13	8.1	60	37.3	12	7.4	161
1372-73	72	44.5	8	4.9	10	6.2	60	37.0	12	7.4	162
<1374-75>	66	35.3	4	2.1	20	10.7	75	40.1	22	11.8	187
1375-76	50	27.8	10	5.5	30	16.7	70	38.9	20	11.1	180
<1376-77>	56	34.6	7	4.3	24	14.8	60	37.0	15	9.3	162
1377-78	40	32.2	0	0.0	24	19.4	42	33.9	18	14.5	124
<1378-79>	?		6		24		50		20		?
1379-80	30	22.7	18	13.6	20	15.2	34	25.8	30	22.7	132

【備考】<>内は前年度の作付面積に関する記述からピックアップした数値。

注) 6¹/₂a.のドレヅを含む。 6a.のソラマメを含む。 3¹/₂a.のドレヅを含む。 5a.のドレヅを含む。
10a.のドレヅを含む。 5a.のドレヅを含む。 小麦とのミックス。

さて、表1からはどのようなことが読み取れるであろうか。

「合計」欄からは、250a.以下が例外的である1343-44年までと、200a.以上が例外的な1358-59年以降との間に大きな違いが見られること、

突出して多い1310-11年を例外として、その後は1343-44年まで大きな変化が見られないこ

と、それとは対照的に、1358-59年以降には徐々に減少していること、などが明らかである。

次に個々の作物について見ることにしよう。

主穀の小麦とオート麦について言えば、総作付面積の個所で述べたと同じことが言える。すなわち、1343-44年までは大きな変動もなく一定規模で推移したものの、その後は次第に減少

した。大麦やライ麦は二義的な作物に過ぎず、30aを超えて作付けされることはなかった。ただ、穀物生産が衰退し始めた1358-59年以降において、大麦のみが70年代に若干増加した。エンドウについては、直営地の存在形態が不明であり、どのような意図で栽培されたかは判然としないものの、穀物の生産性を高める目的で栽培されたものでないことだけは明らかである。穀物生産最終盤の70年代末に最も多くなっていることがその証左である。

以上の6点を総合すれば以下のようにまとめることができよう。すなわち、Monks Eleighでは、1343-44年までは小麦とオート麦を主穀とする穀物生産が活発に続けられたものの、その後は、小麦とオート麦の播種地が縮小されるようになり、それに連動する形で穀物生産そのものも衰退し、最終的には最盛期の半分以上にまで落ち込んでしまった、と。

ところで、1343-44年までと1358-59年以降とは穀物生産に大きな変化が生じていた。これは、14世紀中葉にイングランドを襲った「黒死病」がこのマナーにも大きな影響を及ぼした可能性のあることを示唆するものであるが¹⁷⁾、これについては別の機会に取り上げることにした。また、前後のデータが存在しないため不確かではあるが、1310-11年に播種面積が最大になっていることは、このマナーでも1310-11年頃に直営地生産が最盛期を迎えていたことを示すものであろう。というのは、ケント州内のEbonyやGreat Chartでも1310-11年頃に播種地が最大になっているからであり¹⁸⁾、また、すでに述べたように、カンタベリから派遣された所領管理人を通じて、修道院が統一的な所領経営を行っていたからである。

賦役労働

このマナーの穀物生産は、保有農から徴収された賦役労働と、年間を通じて雇用された犁耕夫・荷馬車番・牝牛番などのファムルス(famulus)の労働によって維持されていた。こ

の節では賦役労働を取り上げ、次節で雇用労働を取り扱う。

賦役は、改めて言うまでもなく、領主が土地保有農民から強制的に徴収したものであるが、賦役そのものは、農民自身に対してではなく、農民が保有する土地に対して課せられていた。このマナーには、賦役を負った保有地が大別して2種類あった。1つは賦役の大半を担っていた隷農保有地(terra)であり¹⁹⁾、いま1つは月曜日にのみ賦役を提供していたマンデイランド(Mondayland)である。前者は21 $\frac{1}{2}$ 単位、後者は5単位存在した。

賦役には、作業内容が多岐にわたる週賦役と、定められた面積の耕地で犁耕や収穫などを行なう定地賦役があった。最初に週賦役を考察する。

1. 週賦役

隷農保有地農民は保有地単位で賦役を行っていたが、週賦役に関する限り、ミカエルマス(Michaelmas: 9月29日)からパスカ(Pasca, イースター: 春分の日以降の満月後最初の日曜日)までに15賦役を行なう保有地17 $\frac{1}{2}$ と、13賦役をなす保有地4の2つに分けられていた。ただし、ペンテコステの週の金曜日からラマスの日までの各週については両者はともに5賦役を納めていた²⁰⁾。この他にもキリスト生誕の祝日(Natales Domini, クリスマス)には1保有地当たり2賦役ほどを納めていた²¹⁾。

1310-11年を例にとれば、ミカエルマスからイースターまでの期間には前者が262 $\frac{1}{2}$ 賦役、後者が52賦役、またペンテコステからラマスまでの8週と1日に両方で903賦役、クリスマスには両方で41賦役、延べにして1258 $\frac{1}{2}$ 日におよぶ賦役を負っていた。これは1保有地当たり58 $\frac{1}{2}$ 日分の賦役になる²²⁾。

これに対し、5つのマンデイランドが負っていた週賦役は1年間に400であり、1保有地当たり80賦役を課せられていた。この他に、農民の名前を冠した2つの1/2保有地(dimidia terra)などが187賦役を納めており²³⁾、1310-11年に修道院が要求できた賦役は合計で1845 $\frac{1}{2}$ で

あった。

このように、修道院はそれぞれの保有地から定められた数の賦役を要求する権利を持っていたが、同時に、裁判所の開設日などを賦役免除日としており、実際に徴収しえたのは免除日を控除した数であった。本稿ではこれらをそれぞれ「権利数」、「免除数」、「要求数」と表現したが、最も重要な項目は「要求数」である。保有地農民が実際に負担しなければならなかった賦役の数だからである。

言うまでもなく、「要求数」のすべてがその

まま遂行されたわけではなく、遂行されることなく貨幣で代納されることもあった。表2は会計報告書裏面の末尾に記された賦役勘定から数値を拾い出して作成したものであるが²⁴⁾、この表により、「要求数」のうち実際に遂行された数がどのように変化したかを見ることにする。

賦役が金納化された後の1379-80年にすべての数値がゼロになっていることを除けば、一見して明らかな他の1つは、1358-59年以降に見られる遂行数の減少である。1343-44年までは、期間中の3分の2を超える年度において1000賦

表2 週賦役の遂行と売却

年 度	権利数	免除数	要求数	遂 行		売 却	
				数	%	数	%
1285-86	1803	129	1674	1530	91.4	144	8.6
1310-11	1845 ¹ / ₂	186	1659 ¹ / ₂	1213	73.1	446 ¹ / ₂	26.9
1311-12	2060 ¹ / ₂	129	1931 ¹ / ₂	1426	73.8	505 ¹ / ₂	26.2
1317-18	1652 ¹ / ₂	150 ¹ / ₂	1502	1030	68.6	472	31.4
1327-28	1940	150 ¹ / ₂	1789 ¹ / ₂	1026 ¹ / ₂	57.4	763	42.6
1329-30	1886	86	1800 ¹ / ₂	1097 ¹ / ₂	61.0	703	39.0
1330-31	2005 ¹ / ₂	107 ¹ / ₂	1898	920	48.5	978	51.5
1331-32	1692 ¹ / ₂	129	1563 ¹ / ₂	904 ¹ / ₂	57.9	658	42.1
1332-33	1929	150 ¹ / ₂	1778 ¹ / ₂	1026	57.7	752 ¹ / ₂	42.3
1333-34	2069	172	1897	966	50.9	931	49.1
1335-36	2015	129	1886	1021	54.1	865	45.9
1336-37	1693	107 ¹ / ₂	1585 ¹ / ₂	957	60.4	628 ¹ / ₂	39.6
1337-38	1800 ¹ / ₂	150 ¹ / ₂	1650	1158	70.2	492	29.8
1338-39	2015 ¹ / ₂	107 ¹ / ₂	1907	877 ¹ / ₂	46.0	1029 ¹ / ₂	53.9
1340-41	1904	107 ¹ / ₂	1796 ¹ / ₂	1139 ¹ / ₂	63.4	657	36.6
1342-43	1796 ¹ / ₂	150 ¹ / ₂	1646	1073	65.2	573	34.8
1343-44	1947	172	1775	1088	61.3	687	38.7
1358-59	1689	86	1603	869 ¹ / ₂	54.2	733 ¹ / ₂	45.8
1359-60	1925 ¹ / ₂	150 ¹ / ₂	1775	1129 ¹ / ₂	63.6	645	36.3
1366-67	1704 ¹ / ₂	215	1489 ¹ / ₂	864	58.0	625 ¹ / ₂	42.0
1367-68	1804 ¹ / ₂	150 ¹ / ₂	1654	835		719	
1368-69	1911 ¹ / ₂	150	1761 ¹ / ₂	895	50.8	866 ¹ / ₂	49.2
1372-73	1697	156 ¹ / ₂	1540 ¹ / ₂	935 ¹ / ₂	60.7	605	39.3
1375-76	1804 ¹ / ₂	156 ¹ / ₂	1648	809	49.1	839	50.9
1377-78	1697	178	1519	818 ¹ / ₂	53.9	700 ¹ / ₂	46.1
1379-80	0	0	0	0		0	

注) 帳簿の小計欄には1812¹/₂と記されているが、明らかな計算ミスなのでこちらを用いた。
帳簿では1908である。「帳簿上の売却」(venditus super comptum) 148を含む。
「帳簿上の売却」41を含む。「遂行」と「売却」の合計は1774¹/₂になる。「帳簿上の売却」21を含む。
「遂行」と「売却」の合計は1554にしかならず、百分率は求めなかった。
帳簿上は895賦役であるが、実際に個々の賦役を計算すると985であった。

役以上が遂行され、遂行が900に満たない年度が1年しかないのに対し、1358-59年以降においては900に満たない年度が過半を占めており、著しく減少していることがわかる。この時期の遂行数の減少は、1358-59年以降に穀物生産が衰退し始めたことの反映であり、いわば当然の現象である。

ところで、こうした遂行数の減少は、徴収された賦役の内容にどのような影響を及ぼしているだろうか。

徴収された週賦役は、基本的には農業経営に必要なさまざまな作業に向けられたが、それぞれの仕事に割り当てられた賦役の数は、その時々が必要度に応じて大きく変動した。作業内容としては、肥料の散布 (in fimis spargendo),

穀物畑の除草 (in blado sarclando), 干草の拡散 (in feno spargendo)・収集 (recolligendo)・積み上げ (cumulando)・運搬 (cariando), 穀物の刈り取り (in blado metendo)・束ね (ligando)・積み上げ (tassando)・脱穀 (triturando), 排水溝の掘削 (in sulcis aquaticis faciendo), 柵作り (in claustra faciendo), さらには水車用貯水池の修理 (in brechia stagni molendini reperando)や樹木の伐採 (in subbosco secando) など、実にさまざまであった²⁵⁾。

こうした作業を6つに分類して示したものが表3である²⁶⁾。

最も大きなウェイトを占めていたのは脱穀作業である。小麦は2½b. (ブッシェル)の脱穀で1賦役、ライ麦は4½b.の脱穀で1賦役とい

表3 遂行された週賦役の内訳

年 度	脱 穀		除 草		干草作り		収 穫		穀物積		その他	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1285-86	412	26.9	432	28.2	112	7.3	76	5.0	64	4.2	434	28.4
1310-11	575	47.4	202	16.7	64	5.3	96	7.9	20	1.6	256	21.1
1311-12	665	46.6	218	15.3	69	4.8	124	8.7	37	2.6	313	22.0
1317-18	558	54.2	216	21.0	51	4.9	41	4.0	16	1.6	148	14.3
1327-28	599½	58.4	151	14.7	46	4.5	71	6.9	26	2.5	133	13.0
1329-30	586½	53.4	120	10.9	52	4.8	96	8.8	21	1.9	222	20.2
1330-31	624	67.8	80	8.7	52	5.7	56	6.1	15	1.6	93	10.1
1331-32	494½	54.7	140	15.5	52	5.7	92	10.2	21	2.3	105	11.6
1332-33	548	53.4	126	12.3	43	4.2	17	1.7	20	1.9	272	26.5
1333-34	642	66.4	134	13.9	47	4.9	44	4.5	19	2.0	80	8.3
1335-36	612	59.9	156	15.3	42	4.1	72	7.0	19	1.9	120	11.8
1336-37	501	52.4	112	11.7	46	4.8	80	8.4	30	3.1	188	19.6
1337-38	743	64.2	112	9.7	48	4.1	86	7.4	31	2.7	138	11.9
1338-39	562	64.1	100	11.4	45	5.1	61½	7.0	21	2.4	88	10.0
1340-41	713½	62.6	100	8.8	32	2.8	138	12.1	20	1.8	136	11.9
1342-43	587	54.7	100	9.3	52	4.9	86	8.0	18	1.7	230	21.4
1343-44	713	65.5	100	9.2	48	4.4	52	4.8	22	2.0	153	14.1
1358-59	322½	37.1	91	10.5	46	5.3	56	6.4	18	2.1	336	38.6
1359-60	480½	42.6	85	7.5	60	5.3	94	8.3	24	2.1	386	34.2
1366-67	366	42.4	70	8.1	76	8.8	48	5.6	40	4.6	264	30.6
1367-68	335	40.1	80	9.6	60	7.2	84	10.0	36	4.3	241	28.8
1368-69	383	38.9	100	10.2	90	9.1	80	8.1	30	3.0	302	30.7
1372-73	300½	32.1	80	8.5	70	7.5	112	12.0	42	4.5	331	35.4
1375-76	293	36.2	60	7.4	40	4.9	160	19.8	40	4.9	216	26.7
1377-78	336½	41.1	80	9.8	30	3.7	72	8.8	50	6.1	250	30.5
1379-80	0		0		0		0		0		0	

った具合に、作物ごとに定められた脱穀数量で賦役を数えていたから²⁷⁾、収量が多い年ほど賦役数は増加することになった。それゆえ、豊・凶作を無視すれば、穀物生産の活発な時期ほど遂行数は多くなるのであり、表3はそのことを示している。

脱穀について多く遂行されたのは穀物畑での除草作業であるが、これも穀物生産の規模を反映して1358-59年以降に著しく減少している。脱穀・除草と同じ傾向を示すと考えられる穀物の積み上げ作業（表では「穀物積」）に逆の現象が見られるが、なぜそうなったのかは不明である。

収穫作業に割り当てられた賦役数が少ないのは、収穫賦役が定地賦役として別に設定されていたからである。したがって、ここに記された収穫作業はあくまでも補完的な仕事であった。

2. 定地賦役

定地賦役は、週賦役とは異なり、隷農保有地のみが負っていた賦役である。

すでに述べたように、マンデイランドが年間1保有地当たり週賦役80を要求されたのに対し、隷農保有地は、1310-11年には1保有地当たり58½賦役を要求されただけであった²⁸⁾。これだけを見れば、隷農保有地の負担が軽かったように思われるが、これから述べる定地賦役を考慮すれば、やはり隷農保有地の方が重い負担を負っていたことになる。

21½の隷農保有地が負担した定地賦役は、冬季犁耕 (arrura yemalis) 75¼a.²⁹⁾、休閑地犁耕 (warecta) 21½a.、春季犁耕 (arrura avene et orde) 75¼a.、および若干の変動が見られた耙耕と収穫であった。これらをまとめたものが表4である³⁰⁾。なお、節で触れたExtentus vetusでは、運搬賦役 (cariagium) も隷農保有地保有農民の義務として描かれているものの³¹⁾、同じRegister Bに記載されているOpera項目の中に記述がないこと、さらには会計報告書には賦役の売却収入として金額のみが記されているに過ぎないことから³²⁾、本稿では取り上

げなかった。

表4により、直営地耕作の変動が定地賦役の遂行にどのような影響を及ぼしていたかを考察する。

小麦・ライ麦畑の犁耕である冬季犁耕の遂行についても、週賦役の個所で見受けられたと同様の傾向が見られる。すなわち、1358-59年以降に比べて、穀物生産が活発であった1343-44年までに多く遂行されていることである。これも、たびたび触れたように、予想されたことであり、改めて説明する必要はないであろう。オート麦・大麦畑の犁耕である春季犁耕についても同様のことが言える。

休閑地犁耕に関しては、冬季・春季犁耕とは異なる傾向が見られる。すなわち、1358-59年以降において遂行数が多いことである。直営地耕作の衰退期になぜ休閑地犁耕のみが増加したのかについては、中世の農書が勧める2回の犁耕がこのマナーで行なわれたのかどうかを含めて³³⁾、残念ながら現在のところ不明である。

耙耕賦役と収穫賦役は、冬季犁耕などとは異なり、賦課・徴収数に若干の変動が見られた。収穫賦役が1317-18年に172a.から258a.に増大した後は全く変動しなかったのに対し、耙耕賦役は、節で述べたように、賦役の徴収内容が異なる1285-86年を例外としても、75¼a.、114¼a.あるいは114¾a.、115¼a.と変化していた。賦課数がこれほど変動した理由については詳らかではないが、1327-28年から1340-41年にかけて付した「？」は、賦課そのものは行なわれていたものの賦役勘定欄にその記述がなく³⁴⁾、賦課数を特定できなかったための処置である。

限られたデータから判断する限り、耙耕賦役の遂行も、犁耕ほどではないものの、穀物生産が低い水準にあった時期に少なくなっている。収穫賦役はすべての賦役の中で最も遂行率の高かったものであるが、それでも1358-59年以降に大きく減少している。

以上のように、休閑地犁耕以外の定地賦役は、直営地生産の動向を反映して1343-44年までは高い水準で遂行されたものの、1358-59年以降

表4 定地賦役

年 度	冬季犁耕 (75 ¹ / ₄ a.)				休閑地犁耕 (21 ¹ / ₂ a.)				春季犁耕 (75 ¹ / ₄ a.)				耙 耕				收 穫					
	遂 行		売 却 %	a.	遂 行		売 却 %	a.	遂 行		売 却 %	a.	遂 行		売 却 %	a.	遂 行		売 却 %	a.		
	a.	%			a.	%			a.	%			a.	%			a.	%				
1285-86	72 ¹ / ₂	96.3	3.7	21 ¹ / ₂	100.0	0	0.0	74	86.0	12	14.0	41 ¹ / ₂	100.0	0	0.0	172	100.0	172	100.0	0	0.0	
1310-11	65 ¹ / ₄	86.7	10	13.3	90.8	2	9.2	65 ¹ / ₄	86.7	10	13.3	114 ³ / ₄	104 ³ / ₄	91.3	8.7	172	100.0	172	100.0	0	0.0	
1311-12	63 ¹ / ₄	84.1	12	15.9	10 ¹ / ₂	48.8	11	51.1	57 ¹ / ₄	76.1	18	23.9	114 ³ / ₄	96 ³ / ₄	84.3	15.7	172	100.0	172	100.0	0	0.0
1317-18	63 ³ / ₄	84.7	10 ¹ / ₂	15.3	3 ¹ / ₂	16.3	18	83.7	53 ³ / ₄	71.4	21 ¹ / ₂	28.6	114 ³ / ₄	73 ¹ / ₄	63.8	36.2	258	100.0	258	100.0	0	0.0
1327-28	57 ¹ / ₄	76.1	18	23.9	0 ¹ / ₂	2.3	21	97.7	27 ¹ / ₄	36.2	48	63.8	?			258	100.0	258	100.0	0	0.0	
1329-30	43 ¹ / ₄	57.5	32	42.5	3 ¹ / ₂	16.3	18	83.7	51 ¹ / ₄	68.1	24	31.9	?			258	100.0	258	100.0	0	0.0	
1330-31	62 ¹ / ₄	82.7	13	17.3	9 ¹ / ₂	44.2	12	55.8	45 ¹ / ₄	60.1	30	39.9	?			258	100.0	258	100.0	0	0.0	
1331-32	57 ¹ / ₄	76.1	18	23.9	5 ¹ / ₂	25.6	16	74.4	35 ¹ / ₄	46.8	40	53.2	?			258	100.0	258	100.0	0	0.0	
1332-33	56 ¹ / ₄	74.8	19	25.2	5 ¹ / ₂	25.6	16	74.4	47 ¹ / ₄	62.8	28	37.2	?			258	100.0	258	100.0	0	0.0	
1333-34	53 ¹ / ₄	70.8	22	29.2	7	32.6	14 ¹ / ₂	67.4	43 ¹ / ₄	57.5	32	42.5	?			258	100.0	258	100.0	0	0.0	
1335-36	45 ¹ / ₄	60.1	30	39.9	3 ¹ / ₂	16.3	18	83.7	57 ¹ / ₄	76.1	18	23.9	?			258	252	258	97.7	6	2.3	
1336-37	40 ¹ / ₄	53.5	35	46.5	5 ¹ / ₂	25.6	16	74.4	47 ¹ / ₄	62.8	28	37.2	?			258	248	258	96.1	10	3.9	
1337-38	57 ¹ / ₄	76.1	18	23.9	5 ¹ / ₂	25.6	16	74.4	49 ¹ / ₄	65.4	26	34.6	?			258	214	258	82.9	44	17.1	
1338-39	57 ¹ / ₄	76.1	18	23.9	5 ¹ / ₂	25.6	16	74.4	49 ¹ / ₄	65.4	26	34.6	?			258	197	258	76.4	61	23.6	
1340-41	55 ¹ / ₄	73.4	20	26.6	5 ¹ / ₂	25.6	16	74.4	56 ³ / ₄	75.4	18 ¹ / ₂	24.6	?			258	233	258	90.3	24	9.7	
1342-43	55	73.1	20 ¹ / ₄	26.9	2 ¹ / ₂	11.6	19	88.4	57 ³ / ₄	76.7	17 ¹ / ₂	23.3	114 ¹ / ₄	75 ¹ / ₄	53.3	46.7	258	250 ¹ / ₂	258	97.1	7 ¹ / ₂	2.9
1343-44	57	75.7	18 ¹ / ₄	24.3	6	27.9	15 ¹ / ₂	72.1	58 ³ / ₄	78.1	16 ¹ / ₂	21.9	114 ¹ / ₄	58 ³ / ₄	51.4	48.6	258	250	96.9	8	3.1	
1358-59	53 ¹ / ₄	70.8	22	29.2	14	65.1	7 ¹ / ₂	34.9	56 ¹ / ₄	74.8	19	25.2	75 ¹ / ₄	56 ¹ / ₄	74.8	25.2	258	218 ³ / ₄	258	84.8	39 ¹ / ₄	15.2
1359-60	45	59.8	30 ¹ / ₄	40.2	6	27.9	15 ¹ / ₂	72.1	43	57.1	32 ¹ / ₄	42.9	114 ¹ / ₄	67	58.6	41.4	258	218 ¹ / ₄	258	84.6	39 ³ / ₄	15.4
1366-67	32	42.5	43 ¹ / ₄	57.5	10	46.5	11 ¹ / ₂	53.5	42	55.8	33 ¹ / ₄	44.2	115 ¹ / ₄	42	36.4	63.6	258	140	54.3	108	41.9	41.9
1367-68	45	59.8	30 ¹ / ₄	40.2	10	46.5	11 ¹ / ₂	53.5	30	39.9	45 ¹ / ₄	60.1	115 ¹ / ₄	40	34.7	65.3	258	148	57.4	75 ¹ / ₄	42.6	42.6
1368-69	25	33.2	50 ¹ / ₄	66.8	5	23.3	16 ¹ / ₂	76.7	28	37.2	47 ¹ / ₄	62.8	115 ¹ / ₄	26	22.6	77.4	258	120	46.5	138	53.5	53.5
1372-73	32	42.5	43 ¹ / ₄	57.5	10	46.5	11 ¹ / ₂	53.5	38	50.5	37 ¹ / ₄	49.5	115 ¹ / ₄	38	33.0	67.0	258	120	46.5	138	53.5	53.5
1375-76	20	26.6	55 ¹ / ₄	73.4	7	32.6	14 ¹ / ₂	67.4	20	26.6	55 ¹ / ₄	73.4	115 ¹ / ₄	30	26.0	74.0	258	128	49.6	130	50.4	50.4
1377-78	15 ¹ / ₄	20.3	60	79.7	7 ¹ / ₂	34.9	14	65.1	20	26.6	55 ¹ / ₄	73.4	115 ¹ / ₄	55 ¹ / ₄	47.9	52.1	258	84	32.6	174	67.4	67.4
1379-80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注) 荘役の記載ミスで、春季犁耕の合計が86aになっている。

になると売却される割合が次第に高くなっていった。

雇用労働

賦役労働の遂行は穀物生産の動向を直接的に反映して「黒死病」以降に大きく減少していたが、ファムルスと呼称された常雇い・季節雇いの雇用労働者の労働はどうであったろうか³⁵⁾。以下、この点を考察する。

このマナーにおける代表的な常雇い労働者は、犁耕夫、穀作管理人（messor）、荷馬車番（carectarius）、牝牛番（vaccarius）、羊番（bercarius）、女中（ancilla domorum）であった。下役（bedellus）も数年間にわたって登場

するが、重複する3年を除いて両者が交互に現れることと給金が同額であることから判断して³⁶⁾、穀作管理人と下役は同種の仕事をこなしていた、したがって呼称だけが変化したのではないかと考えられる。

一方、季節的に雇用された労働者の仕事としては、排水溝の拡張作業や春季の耙耕作業、秋季の収穫作業がほとんどであった。

表5は、会計報告書表面の収支勘定欄に記された「給金」(Solidata)項目および裏面の穀物勘定欄に記された現物給の支払い項目の中から人数をピックアップして作成したものである³⁷⁾。雇用労働者の仕事については数量化できないため、これまでの諸表とは異なり、人数を列挙してある。

表5 雇用労働者数

年 度	年 間 雇 用 労 働 者							季節雇用労働者
	犁耕夫	穀作管理人	荷馬車番	牝牛番	羊 番	女 中	下 役	
1285-86	4			1		1		3
1310-11	4	1	1	1	1	1		5
1311-12	4	1	1	1	1	1		4
1317-18	4	1	1	1	1	1		4
1327-28	4	1	1	1	1	1		3
1329-30	4	1	1	1	1	1		3
1330-31	4	1	1	1	1	1		3
1331-32	4	1	1	1	1	1		3
1332-33	4	1	1	1	1	1		3
1333-34	4	1	1	1	1	1		3
1335-36	4	1	1	1	1	1		3
1336-37	4	1	1	1	1	1		3
1337-38	4	1	1	1	1	1		3
1338-39	4	1	1	1	1	1		3
1340-41	4	1	1	1	1	1		3
1342-43	4	1	1	1	1	1	1	3
1343-44	4	1	1	1	1	1	1	3
1358-59	4	1	1	1	1	1	1	1
1359-60	4		1	1	1		1	
1366-67	4		1	1	1		1	
1367-68	4		1	1	1		1	
1368-69	4		1	1	1		1	
1372-73	4		1	1			1	
1375-76	4	1	1	1				
1377-78	3	1	1	1	1			
1379-80	3	1	1	1	1			

この表から一見して分ることは、季節雇用者の数が最初に減少していること、これに対して、女中を除いた常雇いの数に大きな変化がないこと、犁耕夫の数が減るのが1377-78年になってからであること、である。

これらが意味することは、耕作の縮小が始まると同時に季節雇用者の仕事は簡単に削減されたものの、マナー経営を支える中心的なスタッフにはなかなか手をつけなかったということであろう。

ところで、賦役の遂行数は、直営地耕作の規模が縮小するにつれて、週賦役・定地賦役とも減少していた。ファムルス数は、なぜ同じように削減されなかったのであろうか。あるいは、ファムルスの削減によってではなく、賦役徴収の削減によって穀物生産の縮小に対応したのはなぜであろうか。

可能性としては、例えば、隷属農民の重い賦役に対する反感を考慮して賦役の削減を優先した³⁸⁾、あるいは、主要な農作業をファムルスに委ねる体制が確立していて賦役の削減を優先した、あるいは、賦役の売却収入とファムルスへの給金・現物給を秤にかけて雇用労働を選択した、などが考えられるであろう。

ただ、賦役徴収マナーに関する筆者の研究は緒についたばかりであり、これらの可能性のうちどれが最も高い妥当性を有しているかをここで明らかにすることは不可能である。カンタベリー修道院の所領経営の分析を続ける過程で、いずれこの問題についての結論を提示したいと考えている。

おわりに

以上が、14世紀のMonks Eleighマナーにおいて展開された直営地農業の一端、すなわち、穀物生産における賦役労働と雇用労働についての実態分析である。論点を要約すれば、以下のようになる。

「黒死病」前の1343-44年までは小麦とオート麦を中心とする穀物生産が活発に展開さ

れたが、「黒死病」後の1358-59年から小麦とオート麦の作付面積が減少し始め、それに連動して穀物生産自体も次第に衰退していった。

穀物生産は賦役労働と雇用労働に依存して行なわれたが、賦役は隷農保有地(terra)から徴収された週賦役・定地賦役とマンデイランド(Mondayland)その他から徴収された週賦役で構成されていた。

雇用労働の中心は常雇いのファムルスで、年間を通じて雇用された4名の犁耕夫と各1名の穀作管理人・荷馬車番・牝牛番・羊番・女中の9名であった。季節雇用者は数も少なく、あくまでも補完的なものであった。

穀物生産の規模との関係で言えば、賦役は生産の縮小に応じて遂行数が減少したのに対し、雇用労働は、臨時雇いを別にすれば、賦役のように削減されず、直営地生産最終盤に至るまでほぼその規模が維持された。

以上が本稿で明らかにした点であるが、いくつかの問題についてはほとんど触れなかった。その1つは、上の に関するもので、なぜ賦役の遂行が穀物生産の縮小に連動し、雇用労働がそれほど反応しなかったのか、といった賦役の本質に関わる問題である。いま1つは、穀物生産がなぜ14世紀中葉の「黒死病」以降に衰退し始めたのか、といった「黒死病」の意義・評価に関わる問題である。

これらは、生産物や賦役労働の価格、雇用労働を含む農作業費など、今回は敢えて触れなかった収支面に関する分析とともに、今後の課題としたい。

<あとがき>

ここでは、故森本壘教授の遺稿論文に見られたミスの原因と考えられる「特殊事情」について記したいと思います。

先生は、私がロンドン大学に留学中の、1996年4月8日に入院され97年1月30日に亡くなりました。それゆえ、病状がどのようなものであったかも、闘病中にどのような生活を送られたのかも、直接には何も知りません。帰国後

に奥様の森本俊子様から伺ったこと、留学中に手紙や電話で行なった遣り取りなどを交えて、遺稿論文作成時の事情に触れたいと思います。

入院された時にはすでに肝臓に転移が見られた末期の肺ガンだったそうです。「末期」であることを先生はご存知なく、治癒するものと思っていらっしやった（あるいは、薄々とは気付いておられたものの、そのように振舞っておられた）とのこと。一回目の抗がん剤治療が終わり、6月7日に一時退院された後は常と変わらず研究に励んでおられたそうです。こうした状況の中で取り組まれたのがMonks Eleighについての論文です。

ご承知のように、先生はベネディクト派修道院の所領研究を続けてこられました。先生は当初、カンタベリについての私の成果を待って、ご自身がほぼ達成されたグラム、ノリッチ両修道院の農業・牧畜経営との比較を行ないたい、と言っておられました。ところが、私の研究が牛の歩みよりも鈍かったものですから、多分しびれを切らされて、カンタベリも自分の手でと考えられたのでしょう。

1996年6月26日付けで手紙を下さいました。病気にに関する言葉は一言もなく、私の研究と重複しない形でカンタベリ修道院について研究を進めたいので了承してほしい旨のお手紙でした。先生の期待を裏切り続けてきた自分の怠慢をお詫びした上で「ぜひお願いします」と電話で返事したのを覚えています。

その後、Monks Eleighを含む8マナーの会計報告書のマイクロフィルム化を古文書館に注文されたわけですが、「Canterburyの方でマイクロフィルム化して貰ったmanor accountsの多くが、トップの部分（日付け、裏面ではGrangia）が欠けていたりして、いつのものかよく判らないので、困っています。」と記された9月6日付けの手紙を受け取りました。9月16日だったと思いますが、古文書館の責任者と撮影技師の2人に、すぐに撮り直して送ってくれるよう頼み、その事実を葉書で知らせました。その後先生からは、ご自身でも撮り直しを依頼された旨

の10月10日付けの手紙をいただきました。

研究に一生を捧げられた先生のことですから、例え撮り方の悪いマイクロフィルムであったとしても、そこから可能な限りのデータ収集をされたと思います。会計年度の写った分が届いた段階でそれを確認し、表を完成させようと考えられて……。遺稿論文に掲載された表中の膨大な数の数値に大きなミスがありませんから、この推測は当たっていると思います。それゆえ、問題は撮り直し分が届いた時になります。

撮り直し分がいつ先生の手元に届いたのかは分かりませんが、古文書館の撮影技師の多忙な日々から判断して、届いたのは早くても11月に入ってから、ひょっとして12月になってからかも知れません。いずれにせよ、相次ぐ検査と二度目の抗がん剤治療で先生の体調が最悪に向かっていた時期に届いたことになります。この時期の先生は、肉体的には無論、精神的にも大変な心の葛藤を経験されていたことと思います。論文を書くこと・完成させることが、あるいは心の葛藤・苦しみから逃れる「救い」になっていたのではないのでしょうか。12月28日に論文を提出されていますが、文字通り、死力を振り絞っての論文の作成だったろうと思います。

このように、先生のコンディションが最悪あるいはそれに近い状態だったために、Monks Eleighと他マナーの会計年度の混同もしくは転記ミスといった、普通だったら決して起こるはずのないミスが起こったに違いありません。したがって、このミスは、先生の身体がガンに蝕まれていなかったら決して生じなかった、あるいは、例えそうであったとしても、最初に送られてきたマイクロフィルムが完全なものであれば決して生じなかった、と考えざるをえないミスです。くどくなりますが、今は亡き森本先生のミスは不運な出来事が同時に起こったことで初めて生じるミスでした。

以上が私の考えた「特殊事情」です。

遺稿に見られたミスが原因で、それ以前の膨大な著作・論文等の評価に悪い影響が及ぶこと

だけはなんとしてでも避けたい，そうした一念で長々と記してきました。決して十分とは言えない説明ですが，「特殊事情」をご理解の上，故森本轟教授に対して従前どりの評価を賜りますよう，心からお願い申し上げる次第です。

注

- 1) R.A.L. Smith, CANTERBURY CATHEDRAL PRIORY: A Study in Monastic Administration, Cambridge, 1943 (1969) p.101.
- 2) R.A.L. Smith, ditto. J.F. Nichols, CUSTODIA ESSEXAE, An unpublished London Ph. D. thesis, 1930.
- 3) Monks Eleighの会計報告書の中で最も古いものの表題はComp(otus) l(ohannis?) s(er)uientis de Ylleghe(a) a festo s(an)c(t)i Mich(ael)is Anno r(egni) r(egis) E(dwardi) xiiij usq(ue) ad idem festum reuol(utum?) (1字判読不能)である。これはエドワード1世または2世の13年のミカエルマスから14年の同日までのもの，したがって1285-86年もしくは1319-20年のものであり，1281-82年のものではありません。
- 4) 「1327-28年」と「1331-32年」以外はすべて会計年度の表記が誤っている。
- 5) Folios Cxvj ~ Clvj. ただし，最初の一葉のみナンバリングが明らかに誤っており，Cxlvjが正しい。
- 6) Opera以外に Allocatio, Trituratio et Ventilatio, Expensa operum, Arrura, Herciatura, Messioの項目がある。
- 7) 「地代帳」の表題は，Rentale Man(er)ii de Illeghe ' Monachor(um) Compo(s)itum p(er) tenentes eiusd(em) Temp(or)e F(rat)ris Will(el)mi Woghope Custodis ib(ide)m Anno Regni Reg(is) Ric(ard)i S(e)c(un)di post conq(ue)st(um) Anglie t(er)cio Cl(er)ic(us) Th(omas) Rydleであり，リチャード2世の治世3年(1379-80年)に作成されたことが分る。なお，治世年の暦年への読み替えやキリスト教の祝祭日などの特定はすべてC.R. Cheney (ed.), HANDBOOK OF DATES FOR STUDENTS OF ENGLISH HISTORY, Royal Historical Society, 1945(1996)にもとづいて行なった。

ところで，同じ州内のHadleigh やエセックス州内のBorley, Lallying, Middletonなどのマナーでは

～ の記述に続いて，マナーに付随する資産とその貨幣評価額および保有農の地代・賦役負担などを記した「土地評価簿」Extentaが記載されており，Monks Eleigh分のみが異なった形式をとっていることになる。そうなった理由は明らかではないが，おそらくは，Monks Eleighにおいてのみ「土地評価簿」を発見できなかったRegister Bの編集者が個人名抜きの簡略な「慣習帳」と「地代帳」を代わりに挿入したものであろう。

- 8) ただ，1311・12年度(£8 19s. 6³/₄d.)，1318年度(£9 0³/₄d.)，1328年度(£9 4³/₄d.)，1330～34年度(£9 17s. 0³/₄d.)の如く，定額地代は徐々に増加しているが，1313～17年度，1319～27年度分の会計報告書が存在しないため，特定することは不可能である。
- 9) AはApud Illeghe 'Sunt xxj terr(a) et di(midia) et debent q(ua)l(ibet) terra a festo s(an)c(t)i Mich(ael)is vsq(ue) ad Pascha(ママ) xiiij op(er)a di(midium) S(um)m(a) CCC xij dimid(ium) で始まり，BはIt(em) sunt in d(i)c(t)o Maner(io) viginti et vna t(er)ra et di(midia) terr(a) Et debent p(ri)mo arar(e) ad fr(u)m(entum) et ad auena(m) C viij acr(as) terr(e) (et) di(midiam) et valent xliiij s. ix d. ob. p(re)c(ium) acr(e) vij d. で始まる。
- 10) これ以外には1329-30～33-34，1335-36～38-39，1340-41，1342-43～43-44，1358-59～59-60，1366-67～68-69，1372-73，1375-76，1377-78，1379-80年のものが存在する。
- 11) 1285-86，1311-12，1317-18年の史料も同様の作業を行って作成年を特定した。言うまでもなく，筆者が特定した作成年はすべてArchivesのカタログに記されたものと一致した。なお，1327-28年以降のものはすべてE(dwardi) t(er)cii, Ric(ard)i s(e)c(un)di, Henr(ici) q(ua)rti のように明示されており，そうした作業は不要であった。
- 12) 十分の一税として与えられた14aの内訳は7a.が小麦畑，7a.がオート麦畑であり，犁耕と播種は領主すなわち修道院が行ない，施肥は牧師側の仕事であった。Reg. B, folio Cxlvij dorso. こうした記述

からは、教区牧師分の耕地が特別な区画として存在し修道院の穀物生産とは別に行なわれたかのような印象を受ける。しかし、会計報告書裏面の穀物勘定に記された作物ごとの播種面積には、修道院が播種の責を負っていた十分の一税分の小麦畑7a.とオート麦畑7a.が含まれており、作付面積全体の中から小麦畑とオート麦畑がそれぞれ7a.ずつ引き渡されていたように思われる。

- 13) Reg. B, folio Cxlvij dorso. ただし、十分の一税分を差し引いた残りの面積について史料は449a.と記述している。なお、1a.当たりの評価額について言えば、例えば、ノリッチ司教座聖堂付属修道院の6マナーの評価額は最低が10d., 最高が18d.であり、全体的にEleighよりかなり高かった。森本轟『中世におけるノリッチ司教座聖堂付属修道院の所領管理・経営』名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) Vol.32 No.1, 1995年, 77ページ, 表11。
- 14) 菜園(gardinum)に植えられた分は表1には含まなかった。
- 15) Register B, folio Cxlvj. なお、「会計報告書」の中でこれを明示しているのは1327-28年, 1337-38年~1343-44年, 1359-60年~1379-80年分のみであるが、マナーの慣習を記述したRegister Bに記してある以上、明示していない他の年度にも各人が小麦畑1a.とオート麦畑1a.の合わせて2a.分の収穫物を受け取っていたと考えるべきであろう。例えば、1343-44年の穀物勘定は、小麦について次のように記している。 Fr(umentu)m Idem r(espondet) de Clvj q. ij b. de ex(it)u Cxxxvij acr(rarum) Sem(inatarum) anno p(re)t(er)ito hoc e(st) de acra j q. ij b. deduct(is) inde xij acr(is) p(ro) decim(a) Rector(is) (et) Stipen(da) fam(u)l(or)um vn de corall(o) xij q. Et de// Inde in se(m)i(n)e sup(er) Cxxij acr(as) xxxvii q. ij b. sup(er) ac(ra)m ij b. di. Plus in toto j b. Et in ここから、前年の播種面積が137a.であったこと、牧師への十分の一税分(7a.)とファミルスの給金分(5a.)の計12a.を控除されていること、残りの畑(125a.)からの156q.2b.が修道院の取り分で、そのうちの12q.がクズ麦であったこと、125a.からの収量156q.2b.が1a.当たり1q.2b.

に相当すること、などが読み取れる。

- 16) 犁耕夫の人数を知る手がかりは穀物勘定欄の Liberatio famulorumである。これによれば、1375-76年までは4名が、77-78年からは3名が犁耕夫として雇用され、穀物の支給を受けていた。なお、穀物の支給欄にも登場しない荘役は、1359-60年から給金を受け取るようになっており、これ以降、小麦・オート麦畑の割り当てはなくなったものと解される。
- 17) ケントのGreat Chartマナーでも黒死病後に作付面積が縮小し始めている。拙稿「Great Chartマナーにおける直営地農業後期の穀物生産(1328~1378年)」(『帝塚山経済学』第7巻, 1998年) 57ページ。また、Monks Eleighから20マイルも離れていないBury St. Edmunds修道院に属するRickinghall荘園では1349年に145名もの保有農が死亡している。三好洋子『イギリス中世村落の研究』東京大学出版会, 1981年, 39ページ。
- 18) 拙稿「Ebonyマナーの穀物生産について(1286~1324年)」(『阪南論集 人文・自然科学編』第30巻第1号, 1994年) 18ページおよび同「13・14世紀のGreat Chartマナーにおける直営地耕作について」(『阪南論集 社会科学編』第27巻第1号, 1991年) 83ページ。
- 19) terraは、サフォークを含むEast Angliaで用いられた「隷農保有地」(tenementum)と同じ意味をもつ語であったと考えられる。ただし、1379-80年に作成された「地代帳」によれば、12a.あるいは24a.とされるtenementumとは異なり、terraは面積不定で、50~60a.が多い。Reister B, folio Cxlvij dorso ~ Clvj. なお、tenementumについては、M.R. Postgate, Field Systems of East Anglia, in STUDIES OF FIELD SYSTEMS IN THE BRITISH ISLES (A.R.H. Baker & R.A. Butlin ed., 1973, Cambridge) p.311を参照されたい。
- 20) ペンテコステが移動祝祭日であったため、この期間に含まれる週数と日数が変動し、徴収される賦役数も変動した。
- 21) クリスマスに徴収された隷農保有地全体の賦役は、理由は不明であるが、1310-11, 11-12年には41賦役, 1329-30年~38-39年には39賦役, 1340-41年

- ～59-60年には35賦役，といった具合に変動していた。
- 22) 何日かは二人以上の農民が賦役に出ていたことを示している。80賦役を課せられていたマンデイルランドについても同様のことが言える。
- 23) 1310-11年を例にとれば，187賦役の内訳は以下のとおりである。 Comp(otus) operum : Et de xlvij oper(ibus) de di(midi)a t(er)ra Wolmeri p(er) annu(m) Et de xxxvij oper(ibus) de di(midi)a terr(a) Thom(e) ate Thie Et de ^{xx}_{iii} xvj oper(ibus) de terr(a) Colehog' (et) Agnet(e) vidue p(er) annu(m) Et de vj oper(ibus) de t(er)r(a) Rob(er)ti Sacriste Walt(er)i de Fynchelegh' Rob(er)ti Fullon' Ph(illip)i skarlot (et) loh(ann)e babbe p(ro) aux(lio) in p(ra)to vocato Skippesmed.
- 24) 「要求数」が年度によって大きく異なるのは，すでに述べたように，ペンテコステからラマスまでの週数・日数が変動したことを反映したものであり，「免除数」が異なるのは賦役免除日である祝祭日・裁判所開廷日の日数の変化を反映したものである。
- 25) これらの作業の多くは他のマナーでも共通して見られるものである。農作業の具体的内容については，鷗川馨『中世英国世俗領の研究』（未来社，1966年）153-168ページを参照されたい。
- 26) これらの数値はすべて Compotus から得たものである。
- 27) ちなみに，大麦は5b.，エンドウは4b.，オート麦は7b.の脱穀で1賦役であった。
- 28) 「権利数」が最大の1333-34年でも67賦役にすぎなかった。
- 29) $75\frac{1}{4}a$ のうち $53\frac{3}{4}a$ が地代としての賦役(de gabello)であり， $21\frac{1}{2}a$ がブレカリア(de prece)であった。春季犁耕についても全く同様である。
- 30) これらの数値もすべて Compotus から得られたものである。
- 31) Item [viginti et vna t(er)ra et di(midia) terr(a)] debent cariar(e) om(n)es fimos Cur(je) Et val(et) p(er) (con)munem estimac(i)o(ne)m xxj s. vj d. Register B, folio Cxlvij, dorso.
- 32) 例えば，1329-30年の収支勘定欄には， Cons(uetudines) : Et de x s. ix d. de caria(io) fimor(um) relax(ate) eisd(em) と記されているにすぎない。
- 33) 加藤尚子「イングランド中世『農書』の比較分析 Walter of Henley's Husbandryの2つの写本を中心に」未刊行修士論文（東京大学2001年），19ページ。
- 34) 会計報告書表面の収支勘定欄では賦役の売却(consuetudines)項目の中に賦課されていた痕跡が残されている。例えば，1329-30年には以下のような記述がある。 Consuetudines : Et de x d. de xx acr(is) h(er)ciatur(e) relax(ate) eisd(em) post Nata(lem) d(omi)ni hoc anno Et de ...
- 35) ファムルスの出自や歴史的意義などについては，M.M. Postan, The Famulus: The Estate Labourer in the XIIth and XIIIth Centuries(The Economic History Review Supplements to Vol.2, 1954) を参照されたい。
- 36) 史料に下役が登場するのは1342-43年からであるが，この年を含めて穀作管理人と重複して現れる43-44年，58-59年には，下役は穀物の支給しか受けておらず，「給金」項目の中で穀作管理人と入れ替わって登場する59-60年からは，それまで穀作管理人が得ていたと同額の給金を受け取っている。
- 37) 給金項目に登場するファムルスは給金と穀物の両方を支給されていた。例えば，1317-18年に収穫期に限定して雇用された穀作管理人は，3s.の給金と1q.4b.のライ麦を受け取っていた。これに対し，穀物勘定欄にのみ姿を現す犁耕夫は，すでに述べたように，それぞれが1a分の小麦と1a分のオート麦に加えて，ライ麦あるいは小麦・ライ麦・エンドウを受け取っていた。例えば，年間を通じて雇用された4名の犁耕夫は各1名の荷馬車番と牝牛番と共に1317-18年に26q.のライ麦を，58-59年には小麦・ライ麦・エンドウを合わせて26q.受け取っている。
- 38) 三好洋子氏は重い賦役を嫌って相続を放棄した隷属農民の例を提示された（前掲書，191-194ページ）が，Monks Eleighにおいてもそうした事実が見られるかどうかを明らかにすることが今後の課題である。

(2001年11月24日受理)